

マレーシア

選挙後の経済構造改革への
取り組みが焦点

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部

研究員 塚田 雄太

E-mail : tsukada.yuta@jri.co.jp

■景気回復に一服感

マレーシア景気は、2017年末にかけて回復ペースが一服した。2017年10月の鉱工業生産指数は、前年同月比+3.4%と7~9月期（前年同期比+5.9%）から減速した（右上図）。

詳しくみると、内外需の両面で弱含んだ。輸出向けは、7~9月期の前年同期比+7.2%から同+4.1%に増勢が鈍化した。2016年末からの輸出急増の反動が現れたとみられる。輸出向けを業種別にみると、7~9月期までの輸出増加をけん引した電子・電気機器製造業等で伸びが鈍化した。

一方、内需は、消費、投資ともに減速した。消費の減速は、増額された低所得者向け給付金の支給が2017年8月で終了したことにより、10~12月の所得環境が悪化したことが背景にある。また、投資は輸出の急増を背景とした民間投資の積極化が一巡したことが影響した。

今後を展望すると、輸出は、2017年の急増の反動が続くことやIT需要拡大の一服から増勢鈍化が続くと見込まれる。一方、内需は、春に予定されている下院総選挙に伴う選挙関連消費の活発化等で持ち直すと予想される。以上を踏まえれば、2018年入り後に一段と減速する事態は回避できる見込みである。

■2017年は外部要因でリング高に

2017年の対ドル為替レートは、リング安基調から

リング高へと転じた（右下図）。この背景には、欧米の金融政策の正常化や利上げが緩やかな動きにとどまったことや、世界景気の回復やIT需要の拡大に伴う輸出の増加を受けマレーシア景気が持ち直したことがある。リング高は、輸入インフレや企業の外貨建て債務の抑制に作用する等、マレーシア経済にとってメリットも多い。しかし、このリングの増価は、経済構造改革により財政赤字や資源輸出依存といった課題が解消され、マレーシア経済に対する市場の信認が高まったためではなく、持続性が不透明であることには注意が必要である。

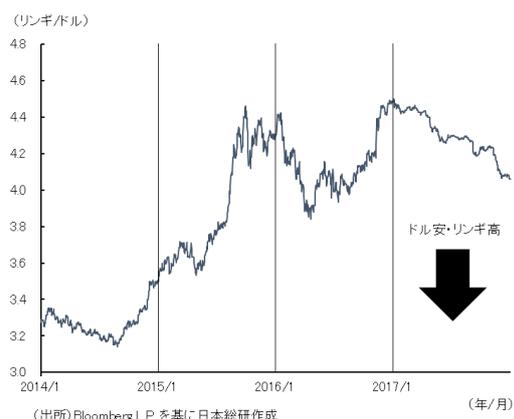
今後を展望すると、欧米の金融引き締めが緩やかにとどまるとみられるなかで、当面はリングが急激に減価する可能性は低い。しかし、春の総選挙にマハティール前首相が野党からの出馬を表明し、与党にとって厳しい選挙戦が予想されるなかで、マレーシア政治の不安定化を悲観した投資家がマレーシアから資金を引き揚げるといったリスクを指摘する声もある。総選挙を混乱なく乗り越え、選挙後に政府が腰を据えて経済構造改革に取り組むことができるか否かが当面の焦点である。

<鉱工業生産指数(前年同期比)>



(出所)マレーシア統計局、マレーシア中央銀行
(注)2017年10~12月期は10月の値。

<リングの対ドルレート>



(出所)Bloomberg L.P.を基に日本総研作成